

岡 おか
不可止 ふかし

萩市
(1910～1963)



【著作】

『松下村塾の指導者』（昭和17・文芸春秋社）
『吉田松陰』（昭和18・大日本雄弁会講談社）
『志士のこころ』（昭和20・乾元社）ほか

松陰先生の意を曲げ且つ虚偽は絶対書かなかつたつもりである。唯だ永遠不滅の日本の歴史が難局に逢着してはより大なる發展を遂げて行く度ごとに、地下の松陰先生に何度でも御苦労して貰はねばならぬ。そして愛するわが国家現実の今日こそ最もその時機であるといふ氣持に於て私は終始した。

(昭和17年1月8日『松下村塾の指導者』
文藝春秋社刊 あとがきより)

戦後は御承知のとおりで、その時代にあつては先驅者であり、歴大な著述を残した先哲であつた松陰の本当の姿を知るものは若い人たちのうちにはほとんどいなくなつた。しかし、考えてみれば、そういう若い人たちも皮膚に爪を立ててみれば、その下には松陰と同じ日本人の血が流れているのだし、その血を同じくする日本人の聡明な知性や情意において、松陰という人は今日と全く無縁な存在ではない。

岡 不可止 年譜

昭和43（一九六〇年）	五歳	3月14日、山口県阿武郡小川村（現・萩市）に生まれる。父乙治郎、母トメの三男。
大正4（一九一五年）	一歳	山口師範学校附属小学校入学。
大正10（一九二一年）	一歳	4月父乙治郎、美祢郡長として奉職のため大田町へ転居。
大正11（一九二二年）	二歳	4月山口県立山口中学校入学。
大正13（一九二四年）	四歳	11月山口県立萩中学校転校。
昭和2（一九二七年）	一七歳	3月同校卒業。4月広島高等師範文科第一部入学。
昭和6（一九三一年）	二一歳	4月広島高等師範中途退学。
昭和7（一九三二年）	二二歳	1月山口市私立野田女学校奉職。6月野田女学校退職、山口県教育会嘱託、『吉田松陰全集』編集。10月門司市（現・北九州市）東条正吉二女富美子と結婚。
昭和8（一九三三年）	二三歳	5月長男耿一郎誕生。
昭和10（一九三五年）	二五歳	4月長女淑子誕生。
昭和11（一九三六年）	二六歳	2月岩波書店勤務。
昭和14（一九三九年）	二九歳	1月東京市（現・東京都）渋谷区代々木初台に転居。
昭和17（一九四二年）	三二歳	2月『松下村塾の指導者』を文藝春秋社より出版。
昭和18（一九四三年）	三三歳	4月『吉田松陰』を講談社より出版。
昭和19（一九四四年）	三四歳	10月応召、広島県海兵团に入団。
昭和20（一九四五年）	三五歳	1月『志士のこころ』を乾元社より出版。5月『久坂玄瑞』を文藝春秋社より出版。但し空襲のため焼失。8月終戦のため、家族の疎開先である防府市右田へ復員。
昭和22（一九四七年）	三七歳	1月山口県社会教育事務を嘱託。
昭和23（一九四八年）	三八歳	7月知事公室兼務。12月文化関係事務を嘱託。知事公室勤務。
昭和24（一九四九年）	三九歳	3月総務部文化課文化係長。
昭和25（一九五〇年）	四〇歳	1月総務部文化課文化班長。
昭和26（一九五一年）	四一歳	6月知事公室文化広報課長。
昭和28（一九五三年）	四三歳	7月総務部県民室長。
昭和32（一九五七年）	四七歳	8月総務部学事広報課長。
昭和33（一九五八年）	四八歳	9月山口県庁を依願退職。
昭和34（一九五九年）	四九歳	1月全国知事会勤務。雑誌『都道府県展望』編集。同月、東京都世田谷区野沢町に転居。
昭和38（一九六三年）	五三歳	11月『吉田松陰』角川書店より出版。
昭和40（一九六五年）		6月脾臓癌のため、お茶の水杏雲堂病院に入院、手術。一応退院。7月、日野市石塚病院に再入院。10月28日午前9時、石塚病院において逝去。同月30日日野市において葬儀。法名「不可得院史窓了鑑居士」。

遺文集『風韻無限』（昭和40・4 編集人岡耿一郎）刊行。

岡不可止は、古武士的風貌で、万事純粹、徹底して思考しなければすまない性格であつた。

思考しなければすまない性格であつた。

明治四十三年（一九一〇）三月阿武郡の小川村（現萩市）に生まれ、県立萩中学校卒業後、直ちに広島高等師範学校に入学。卒業を間近に控へ、情熱の迸るところ左翼運動に走った。吉田松陰の研究家玖村敏雄は、卒論の審査にあたり、「彼（岡）が選んだ卒論は、左翼的角度から松陰を解釈しようとする無理があった。」^{（一）} といひ、「当時は思想問題が非常に喧し時代であつたので、退学のやむなきにいたつたよう、誠に気の毒であつた」と述べている。当日の岡の日記の中に、「父は肝臓癌と自覚した時『あまり子供が肝を焼いたからとうとうこんな病気になったのだらう。』などと、寂しそうに見舞ひにきた友人に話したことも、今では僕の胸を疼かせるのだ」と記している。

昭和七年（一九三二）、山口県教育会において『吉田松陰全集』の編集事業に従事し、松陰の研究に熱を入れ、後日執筆した『松下村塾の指導者』、『吉田松陰』は評論家岡不執筆の不朽の名著となった。当時の学生達に感動し、悲憤慷慨して読んだものである。

戦後、岡は海兵団から復員し、家族の疎開先であった防府市に帰り、佐波川で鮒を釣っていたところ、たまたま田中龍夫山口県知事に見出され、県政を手伝う事となる。その後、岡は文化関係に才能を発揮し、昭和二十六年（一九五二）には山口県芸術文化振興奨励賞の制度を設立するとともに、知事が直接住民の声を聴く移動県民室を実施したのも岡のアイデアであった。酒が入り、興が乗ると「船頭小唄」を情緒たっぷりに聞かせてくれたもので、今も耳の奥に残っている。

昭和三十三年（一九五八）、不慮の事件のため県庁を去ることになったが、岡課長（当時）の潔い進退を惜しむ声は多かった。一旦折った筆をついで、全国知事会で「都道府県展望」の編集に力をふるっていた矢先、病魔の冒すところとなり入院、手術。しかし、進行していた脾臓癌は摘出不可能な状態であった。小説、随筆、詩歌など多くの作品と、「手術した脾臓を見せてくれ」と豪快な逸話を残し、昭和三十八年（一九六三）波瀾万丈の人生に幕を下ろした。

(文・田中宏)



昭和天皇に吉田松陰遺墨を説明する岡不可止
昭和31年4月8日 山口県庁にて
『行幸啓誌』（山口県）より



散策中の岡夫妻（昭和33年10月）